

---

# 三年二組の私刑囚

頭照多髪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三年二組の私刑囚

### 【Nコード】

N4513P

### 【作者名】

頭照多髪

### 【あらすじ】

仲の良い女の子がちょっと喧嘩するおはなし

## （前書き）

この物語はフィクションです。  
実在する団体、組織、国、人物等に何ら関係ありません。

ねえ、知ってる？

算数の教科書の向こう側から顔をのぞかせるひとりの女の子。その表情は、口の中から言葉が飛び出すのを今か今かと待ち望んでいるかに思えた。

「わたし、悪いけど次の勉強しておかないとならないの」

「特にあたまも良くなくせに、別にいいじゃない」

失礼ね、という意志を喉元まで持ち上げては、飲み込んだ。すかさずかけていた眼鏡の位置を修正、目の前の“問題”に着手することにした。

「わかったわ、教えてくださる？ あきなちゃん」

「さいしょからそう言えばよかったのよ、みのりちゃんは私達が“アイツ”の事いじめてるって知ってるよね？」

毎度の事ながら、遠慮が無いというか、欠如しているというか。

このあきなという女の子はどこにでもいるごく普通の女の子だ。成績は優秀で友人達からの期待も厚く、駆け足では右に出るものはいない。このクラスでリーダー的位置に居座っている。

自分という存在を他者よりも優位に立たせる事によって幸福を覚えるところも、どこにでもいる普通の女の子だ。

「……？ うん、知ってるよ。夏休みの宿題みせてってあきなちゃんに頼んだ“アイツ”でしょ？」

「そう。見せてやったのにお金ださなかったアイツ。」

“アイツ”と呼ばれているのは水杜真里という女の子である。同じ小学校三学年に通う……いや、厳密には『通っていた』女の子だ。

出席番号18番、夏休みが始まる前まではクラス内の多くの子供達が友人関係を持っていた。

あきなちゃんに夏休みの宿題を見せてと頼んだところ、「あたしだってジゼンでやってんじゃないんだから、お金くらい出るわよね」というご芳志の心を表したあきなちゃんに対して、友達だから、と言い放ち感謝の言葉だけで済ましたアイツだ。それからソレに友人関係を持っていた奴は消えていき、水杜自体も学校から消えていった。みんなは自業自得と言っている。

「アイツさ、先週“くび”くくつてしんじやつたんだってさ」

あきなは机に腰を寄せ、おもむろに窓際の少し黒ずんだカーテンを指でなぞりながら続けた。

「ひどい話だよねー。暗くてきもちわるい奴だったけどカワイソウだから友達してあげてたのに、何も無しに勝手にしぬんだよ？ ありえないもん」

私は「うん」と相槌を打った。

否、打たされた。

「それでね、私達おもちゃが亡くなっちゃってすつごく残念なんだよね。みのりちゃんさあ……」

視界には真つ黒な瞳でこちらを突き刺すように見つめるあきなちゃんが映っていた。お互いに声は出さなかったが、次に何を言いつ出すのか何を言おうとしているのかを思い浮かべた時、心臓が早鐘を打つかのように警告を刻んでいた。

息は詰まり、全身の汗腺は閉じ、黒目は眼球の奥へと逃げ場を作るように小さくなる。かすかに聞こえてくる子供たちの遊び声がまるで自分をあざ笑っているのかのように感じた。

窓にわずかに開いた隙間から入りカーテンを動かし絶命する風の

ように、必死の思いで声を出した。

「あきな……ちゃん……？」

「やだなあ、どうしたの？ 人の話は最後まで聞こうっておかあさんに教えてもらわなかった？」

桜色の唇から白い歯をのぞかせ笑いながらあきなの肩を軽く叩く。

「今みのりちゃんが苦手な友達っていない？」

みのりは頬をかき地面に視線を落とした。そして唇を軽く噛み微笑んだ。

「えつと……C組のトシキ君って知ってる……かな？」

「ああ！ あれかあ、落とした消しゴムとか勝手に拾ってウザいよね、頼んでもないのにさ」

「う、うん。ほんとだよね！ いつも外行って手洗ってないだろうし、ちよつとイヤかな」

あきなが続けようとした時に「そろそろ戻ろうよ」と廊下側の数人から声がかかった。丁度教室中を見渡せる黒板の上方に取り付けられた時計を見ると、長針が9を指そうとしている。

「あー、そうだね。そろそろ戻るよ、ばいばいみのりちゃん」

張り詰めた空気がしぼんでいくのを体で感じた。

またいつものように流れていく日常、珍しく給食に現れたゼリーを体内へと押し込み必要最低限のエネルギー確保の後に淡々と授業を消化していく。

太陽はより赤く染まり、当たりは鮮血にまみれたかのような美しい色合いになっていた。

「今日は別々に下校してもいいんだって先生言ってたっけ……すぐ帰ろうかな」

ポツリと窓から外を眺めながらみのりは声を漏らす。

教室内の子供たちが片手で数える程度まで減ったのを見計らい、みのりは個人ロッカーにある、ねんど用の箱へと桃色のかわいい筆箱を隠した。

基本的にこの小学校では翌日の課程の準備を怠らせないように道具を学校内に置いていく事を禁止しているのだが、この筆箱だけはいつも置いて帰っている。

「さて……と、もうやることないしお腹もへったし、帰ろうつと」  
足取りは軽快、毎朝観ている子供向け番組の主題歌のテンポを刻んでいた。賑わう商店街をそそくさと抜け、適当に同じ生徒へと挨拶をこなしながら自宅へと向かう。

塀に囲まれた家を何件か通り過ぎ、表札に「西山」と書かれた分譲住宅、二階建ての一軒家で止まり玄関へと手をかける。

「ただいま」

「あら、おかえり。今日は友達と遊んでこなかったのね？」

「うん、今日は疲れちゃって。それよりお腹へったよおかあさん」  
扉を抜け顔を覗かせたみのりの母、なんともない親子の会話を交わし自分の部屋が位置する二階へと階段をあがる。

両肩への重しとなっていたランドセルを外し、ベッドへとおろした。

「……はあ、あきなちゃん。どうしてあんなに怖くなったのかなあ」  
西山みのり。彼女は生まれつき視力があまり良くはなく幼い頃から眼鏡をかけていた。だが、お世辞にも似合うと言えるビジュアルではなくその事で周りの子供たちから冷やかしを受けている女の子だった。

自然と孤立。このままではコミュニケーション障害になってしまうのではないかと両親は大変心を痛めていた。

「あなた、友達いないの？　じゃあ、私がなつてあげる。あきなつて呼んでね。これ、お気に入り筆箱なんだけど、あなたにあげる」

小学校1学年、初めて下校する時の出来事であった。  
かわいい桃色の筆箱をあきなから貰い、それをこの三年間ずっと大切に扱えるように自宅には持ち帰っていなかった。

「あの時のあきなちゃん、すつごくかつこよかった。みんなに囲まれて笑ってるあきなちゃん、私には到底あんなことできそうにないもの。でも……どうしてこんなイジメなんて……」

溢れ出る雫を指で拭うことでしか、止められなかった。

「みのりー？ お腹空いてるんじゃない？ なかったのー？ お父さんもすぐ帰ってくるんだからご飯作るの手伝ってくれない？」

自室の窓から外を見るとすでに赤みを帯びた街並みは消え失せ、風に乗リ流れてくる寂しさが身を震わせる。

「はあーい」

みのりは多少怒りを交えた音で応対した。家族との時間を過ごしたあと、眠りにつく。

「わたしね」

「うん」

「あきなちゃんにあえて、うれしかったんだ」

「うん、わたしもだよ、みのりちゃん」

薄らいだ意識の中でゆつくりとまぶたをこする。毎朝決められた時間に作動するウサギの模様が描かれた時計を手にとると、短針は6を指していた。

「……へんな夢みたわ、昨日の事もよくおぼえてないし」

顔を洗いお気に入りの桃色のワンピースを身にまとい、胸に輝く「三年二組 西山みのり」のネームプレート。準備は完璧だ。筆箱がないぶん、わずかではあるが軽いランドセルを片手にリビングへと降りた。

「あら、おはようみのり」

「あ、おかあさんおはよー。お父さんは？」

母親は底に黒い液体が残るコップと、食パンの欠片が散りばめられた食器を指さした。「はいね」とリアクションを起こし、テーブルの上の温かいミルクを手にとった。

「そうそう、お父さん毎日こんな早くからみのりの為にがんばってきてくれるんだから、みのりも学校ちゃんとしなきゃダメよ?」  
ミルクで曇った眼鏡を拭き、返事なのかうめき声なのか区別のない声を出す。

「あ、ゆつくりしてたらこんな時間。おかあさんいつてきます」

「あ! もう。あの子は話をきかないんだから……」

学校では一方的に莫逆とした友人の圧力。家庭内では将来の説教? うんざりだわ。私には私の時間があつてしかるべきなのよ。愛しい私の時間。

胸の内に様々な想いを秘め、みのりは学校に着いた。普段よりも少し早めについてしまったのでいつも賑やかな雰囲気とは裏腹に、長年放置された井戸のように深く静かだった。

3学年の教室が位置する階までは階段を2つあがらなければならぬ、寝起きだとしても少し気だるさを感じる所作である。

「でさー、次どうするの? わたしらが狙われたらイヤじゃん」

教室で話し声。

「ん……?」

特にその気は無かったのだが、身を潜め息を殺し耳を立てた。

「ゆかは? アイツ最近、体育の先生に気に入られて調子乗ってるじゃん」

「だめよ、チクられたらもつと面倒なもの」

「じゃあ、みのりは?」

日常で聞き慣れたその単語が、今だけはどんな切れ味を持つ刃物よりも心に突き刺さった。

「だめだよ、だってあきなとべつたりじゃん。あたしらが狙われちゃうわ」

「あ。そっか」

散々悩んでいる彼らをよそに、完全に入るタイミングを見失った

みのりもまた悩んでいた。が、耳に入るは陽気な男子の声。チャンスである。

「お、みんなはえーな、おはよー」

「おはよー」

ぼつぼつと返される挨拶にむすつとした表情で机に座る男子。みのりは少し間をあげたのちに入っていた。

それから数分もしないうちに教室内ではいつもの賑やかな雰囲気かもどっていった。

「あー。みんなおはよう」

「せんせーおはよーございまーす」

担任の教師が眠たそうな顔で教卓へ立った。着衣しているジャージがさらにだらしく見える。

「今日は、大事な話があります。C組のトシキ君なんですが、今朝登下校中に何者かに刺されて意識が無いそうです。親には連絡をまわしてあるので、下校の際には十分気をつけてください」

途端に教室内には不穏な空気が漂った。そして特にみのりは動揺した。昨日の今日でこんな事が？

「はは、そんなまさか……」

生徒の安全を最優先にし授業は金曜日だったが、午前中しか行われなかった。一部の生徒は喜び、一部の生徒は悲しみ、一部の生徒は恐れた。

最後の授業の鐘が鳴り、全過程終了を知らしめる。半ば強制的に集団での下校を行った。

集団で下校する最中、みのりの班で一緒だった同じ学年の子はみのりにやさしく耳打ちした。

「同じクラスのかなちゃん、よしき君、たかし君いじめることにしたから、よろしくね」

硬直、みのりは表面上にはなんら変化を見せないが、一筋の汗が首筋を張って地に落ちた。後ろから耳打ちをされていたので顔はわからないが、相手は笑っているように思える。

よろしく。とは“口出しは厳禁”の意味で子供の間で交わされていた。イジメの原因は特に意味は無い。だが、イジメ自体には『自らの身を守る』意味がある。

少なくとも攻撃側に加担していれば、矛先がこちらに向くこともない。幼くして子供たちはそれを知っていた。

何事も無かったかのように、手を振り班とは別れた。実際正当防衛などの言葉があるように自らの身を守る為だったならなんらおかしくはない。何事も無いはずなのである。

「あ、おかえりみのり。心配したのよ？ トシキ君が大変なことになるたんですってね」

母親は血相を変えて歩み寄ってきた。心配、それは娘の事だけなのだろうか。みのりはどうにもやりきれない気持ちを抱え、何も口に出さずに二階へとあがった。

「あら……、どうしたのかしらあの子……」

ガチャリ。鈍色に光るドアノブの突起物をひねり、外界からの自室への侵入経路を途絶えた。

筆箱の入ったランドセルを机の上に放り投げ、自身もベッドへ倒れこんだ。

「はあ……」

私は、なんなのだろうか。クラスでも、いや、学年でも絶対的な人気を持っているあきなちゃんに巢食う蟲？ 自分の居所確保の為に、なんの疑問も無くただただ友達を生贄に？

方向性を見失った自分の芯が、ぐらぐらと心をゆさぶる。気がつけば眼からは涙が溢れていた。世界がゆがむ、焦点の合わない視界を置き去りに、ゆっくりとまぶたをとじた。

「なあ、見てみるよアイツ変なメガネかけてるぜ」

「ほんとだ、きもちわるいなあ」

『やめて』

「もつとみんな呼んでこようぜ」

「おっしや」

「な？ 言ったとおりだろ？」

「ほんとだゝきもちわるうゝい」

『やめて』

「きもめがねえゝ」

「お前こつちくんなよ」

「これでも投げる？」

『やめて！』

一斉に声が止んだ。小鳥のさえずりと自分の激しい呼吸音が聞こえ始め、眼は窓から射し込む優しい光に照らされる部屋をうつしていた。

「……、なんで今更……。あの時の事……」

時計を手にとると午前8時前、帰ってきてから丸々12時間以上寝ていたことになる。今日は土曜日なので学校は無い、特に予定も無いので焦る必要は無かった。

寝汗だろうが、ひどく濡れていて不快な肌触りの衣服を脱ぎ、着替えをした。リビングに降りていくと、トシキ君の事で地元のニュースはもちきりだった。

「あら、おはよう。珍しく7時すぎだったわね。すごいわよ、ニュースに新聞。昨日の事ばかり」

和気あいあい、と捉えていいのだろうか。とにかく落ち込んでいる様子でも無く、怒っている様子でも無く、母親はただニュースに飛びついていていた。

「おはよう……」

どうにも体が怠く、重い。程度にもよるが、悪夢を見る日は決まってそうだった。今日は一際体が重い。

普段使うコップに鉛でも入っているのかと勘違いする程だ。

「どうしたの？ やけに顔色が悪いわね」

「ううん、大丈夫。ちょっと寝汗かいちゃって気持ち悪かっただけ」  
心配をかけるも本人がそう言うなら、という理由であまり深くは聞かず、興味はすぐにテレビにうつった。頬杖をつきながらテレビにリモコンを突き出していた母は、何かを思い出したようにこつちを振り向いた。

「あ、そういえば。あきなちゃんから電話かかってきてたわよ？」

お昼からみんなで遊びたいんだけどって」

「そう、わかった。ありがと」

動くのを嫌がる体に鞭を入れ、漸進的に公園へと向う。特に遊具もなく物淋しげな公園には、身の丈の近い子供たちが居座っていた。

「あ、みのりちゃん。おはよう」

「おはよう、今日少ないね」

視界にはあきなの他に2人しかいなかった。普段であれば同クラスに留まらずに7〜8人は優に超える人数で遊んでいる。

「その事なんだけどね、この前みのりちゃんの事悪く言ってる奴がいてさ。処分したんだ」

「えっ……？」

目の前に立つあきなのは、下唇に軽く指を当て悪戯を彷彿とさせるような表情で喋っていた。「処分」の意味を確かめる勇気はみのりには、無かった。

「そ、そうなの。なんだか寂しい……ね」咳払いをしながら、みのりは言った。

何を言っているんだ

「……みのりちゃん？ 私達の為なんだよ？」あきなの声突き刺さった。

「あっ、ごめんね。つい……」

歪んでいる友情に亀裂が走りそうになる、どうしようも無い事を

実感しながらもみのりは目前の問題達に着手する。

こうしてまた、陽は沈んだ。

学校が始まる、小学生路上殺傷事件によって通学路は一際賑わっていた。大人たちは自分の子供の心配をし、子供達はせっかくの惰眠を貪る口実を捨てるのは忍びなかった。

無邪気に学校内で挨拶を交わす子供たち。つい先日まで同じように挨拶をしていた一部の人は机につっぱし、口を頑なに閉じ、声を発しなかった。

「みんな、おはよう。今日は欠席多いし、なんだか元氣ねーな」

担任の教師は教室の半数にも及ぶ空いた机と、声の量に違和感を覚えながらも、淡々と業務をこなした。

昼休みになり、風のごとく静かな教室にぽつりとあきながやってきた。右手の裾を左手で掴みながらふらつく足取りでいる。普段の姿からは想像できなかった。

「どうしたの？ あきなちゃん、顔色わるいよ？」みのりは見たままの感想を言った。

「あのね、みのりちゃん。あとで話があるんだけど、放課後こつち来てくれる？」あきは視線をみのりとは合わせる事無く、ぶつきらばうに告げた。

怪訝に思いながらも一応は頷き、その場は帰す。心に根付いた何かが取れないまま、その日の授業を終えた。

言われた通りにみのりはあきなの居る教室へと向かった。

日も随分と傾き、部屋に射し込む赤みを帯びた光は、窓枠によっていくつも十字に切りつけられ床に落ちていた。

あきはみのりの姿を廊下越しに確認すると、体重を預けていた机を後ろに引き降る。あたりをいくらか見回しても、そこにはあきな以外には誰もいなかった。

「どうしたの？ あきなちゃん。まだ顔色わるいよ？」先にみのり

は切り出した。

あきなはしぶしぶといったような顔で机の中から、個人ロッカーに隠していた桃色の筆箱をだした。

そう、みのりの筆箱である。

「これは、何？　みのりちゃん。覚えてるよね？　もちろん私は覚えてる。あなたに初めて会った時の、筆箱なんだものね」

みのりはろうばいした。声の調子から、敵意を向けられていることは明らかであった。

「あ、それは、ね。ホコリとか付けたくないし、家に持ち帰ったら親に買い換えるとか言われたりしそうだから……」

「ふざけないで！」机を思い切り叩きながらあきなは言った。その拳には血が出ている。「なんで？　なんでなの？　理由は何？　私が嫌いになったの？　あんなに私はみのりちゃんに好きだったのに？　私はずつとみのりちゃんに好きでいて欲しかったんだよ？　どうして？　私の事、あきなの事をみのりちゃん、好きじゃなくなったの？　そうなの？」両の頬を血が滲んでいる手で触れながら、壁に頭を打ち付け、震えた声でずつとわめいていた。

目の前で起きている明らかに変異に対して、どういった対応をすればいいのかわからない、ただ、ただ黙ってみのりは観ている事しかできなかった。

「みのりちゃんの為にあんなにしたのに、あんなに沢山、みのりちゃんの為に、いらないやつ、やって、やってきたのに、為だけに……」声が甲高くなり、あきなは涙を流していた。「この前だって、カッターでがんばってみのりちゃんが嫌いなやつ、消したのに……どうしてなの……？」

一瞬、意味の取れない事をあきなの口から聞いた。消した？　何を？　嫌いなやつ？　まさか、彼女はただの小学生だ、そんな事をするとは思えない。ましてや、私のためなんかに！

「……したのに。……は知らないから」ふと気がつくと、あきなは泣き叫ぶのをやめて何かを言っていた。とにかく、今はなんでもい

い、謝らなければならない。そうみのりは感じた。

「ごめんね、あきなちゃん。あきなちゃんの気持ち何も理解できないくて、ごめん。これからちゃんと向き合うから、だから、もう傷つけるのやめて」

みのりはなだめようと必死だった、刺激しないように精一杯の笑顔と声色を作りながら喋るその様は、さながら新米の母親のようだった。

「みのりちゃん……」

あきなの顔からは相変わらず涙がこぼれていたが、先ほどまでの鬼のような形相は解けいかにも小学三年生のような顔つきになっていった。警戒が解かれ始めているのをみのりは感じた。

ゆつくりと両手を前に出しながらあきは歩いてくる、母親にむかってよちよち歩きで抱擁を求める赤子のように。みのりはそれに応え両の手を広げ待った。あきなの頭が胸にうづくまるのを。

「あきなちゃん……ごめんね……」

みのりの目にはあきなの頭頂部が映る、その時、急に腹部から熱く、鈍い感触が沸いてきた。そのせいか、だんだんとこめかみが熱くなり眉をひそめ、涙がこぼれて来た。ふとももにむかつて汗が垂れていくのを感じる。

ゆつくりとあきなをみのりは抱きしめた、そしてわかった。もう既にあきなが一粒も涙を流していないことを、まったく微動だにしていけないことを。

「みのりちゃんの為……みのりちゃんの為……」

声がする、目の前の黒い塊から。まだ汗は垂れている、腹部からずっと汗は垂れている。下着を濡らし、靴も湿らせているのがわかった。

そこで初めてみのりは気が付いた、これは汗ではない。

「あきな……ちゃん……？ どうして……？」

抱きしめていた腕を解き、崩れ落ちながらみのりは精一杯声を出そうとした。あきははずつとみのりを見ていた、動かなくなるまで、

ずっと見つめ合っていた。

意識が薄らぎ、視界の外側から黒い影が遍く。

みのりが最後に捉えていたものは、夕焼けに染められたカッターを持った少女と、二人だけの教室に響き渡るサイレンの音だけだった。

（後書き）

そのうち事件を捜査する警察と  
マスコミの餌食になったみのりの家族を描く予定。  
あくまで予定。未定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4513p/>

---

三年二組の私刑囚

2010年12月12日07時55分発行